



201011
haluhill

Twitter Novels

春昼が紡ぐツイッター小説の世界へようこそ。この電子書籍では、ユーザーアカウントhaluhillが11月中にツイッターで発表したツイッター小説・全68作品を収録しています。作品は社会風刺小説、シュールリアリズム、アフォリズムなどジャンルごとに章立てされています。

8月からツイッター開始、11月で電子書籍化4作品目です。ツイッター小説は全てパブで電子出版しています。ちなみに8月は62作品、9月は64作品、10月は54作品収録でした。11月から、1つのツイートで終わらずに、複数ツイートで1つの物語とかお話になっている連作ツイートが増えました。もう1ツイート1短編小説作ってるぜなうと主張できない状態ですが（笑）、とりあえず一般的な小説よりずっと短いので、許してやってください。

今日現在もツイッターでハッシュタグ#twonovelを使用して、超短編小説をつぶやいているので（小説以外のつぶやきも多いけど（笑））、12月以降もよろしくお願いします。

表紙画像はモディリアニ(1884-1920)作「Portrait of Jeanne Hébuterne」(1898-1920)です。ゴダールの映画風のフォントでタイトル文を重ねました（笑）。

モディリアニの描く女性は、毎回首が曲がってますね。僕も子どもの頃からずっと首が曲がっています。体の異常はコンプレックスでしたが、コンプレックス、すなわち人と違う特徴は、ストレスの原因にももなれば、グローバル市場で戦う武器にもなる。というわけで、モディリアニの首が曲がっている肖像画を表紙に使わせていただきました。実際肖像画の女性の首が曲がっているかどうかは不明。モディリアニの絵の女性は、みんな首が曲がっているから。人間なんてそんなもの。まっすぐ正しい小説だけが、小説じゃない。というわけで、傾いている異形のツイッター小説、11月作成分をお送りします。最後までお楽しみ下さい。

大臣を24時間USTREAMで公開生中継しようという企画が国会審議を通過した。大臣たちはトイレの時間を除き、撮影され続ける。失言は許されない。視聴者からは際限なくコメントを書き込まれる。これでは政治に取り組むこともできない。大臣たちの自由はトイレの中にしかない。

日本対中国の試合をスタジアムに観に行った。日本側は選手もサポーターもみんな全裸だった。男女とも、裸でも恥ずかしくなさそうだ。僕だけ服を着ているのも変だったので、僕も服を脱ぎ捨てて応援した。中国側は選手もサポーターもみんな服を着ていた。

アイドルの水着写真集を撮影しに、南の島に行った。撮影中に北の空からミサイルが飛んできた。何発もの赤いミサイルが島を襲った。僕は生き残ったが、テレビで人気のアイドルは死んでしまった。彼女が死んだことを公表したら、世論に悪影響を及ぼすから、政府は事実を隠蔽するだろう。

中学生の女の子が遺書を残して自殺した。翌週には担任教師と、いじめっこが自殺した。続いて同級生全員が自殺し、翌月には学校の生徒と先生全員が自殺した。自殺の連鎖は続く。3ヵ月後には街の住人全員、半年後には、同じ県の人が全員自殺した。1年後には日本人全員が自殺していた。

1億2千万人が自殺し、国家機能を消失した国として、日本がギネスブックに載った。日本領土は中国が征服したが、死体を処理しているうちに中国国内にも自殺者が出始めた。中国人全員が自殺した3年後、地球人類69億人が自殺、人類は滅亡した。地球環境と生命多様性は保全された。

就職できない学生達の多くは、就職留年した。留年する経済的、精神的余裕がない人は、望まない仕事についたり、自殺したり、ホームレスになったりした。学生の中に、就職活動しないでホームレスになるブームが到来。「ホームレスという生き方」が、就職雑誌で特集されたりもした。

就職の面接に行ったら、面接官のうち一人が血を流して机につっぷしていた。「すみません、彼自殺しちゃいました」一番偉そうな面接官が言う。「いやあ、昨日 面接中に自殺した学生もいたんですよ。困ったものです」面接官達は笑っている。僕達学生は緊張している。集団面接が始まった。

就職できない学生達は、自分自身の人格と人生を否定されたような気分になった。無気力化した学生達の一部は、路上でモテまくりの芸能人を殴って怪我を負わせたり、老人の人質をとって家屋にたてこもって、テレビで生中継されたりした。事件後、政府も企業も状況を改善できなかった。

怒っているからといって外に発散すれば、パワハラやセクハラやDVや暴行事件になる。内にこめれば、ストレスがたまって向精神薬に頼ることになる。怒りを表現に昇華させよう、マイルス・デイビスやコルトレーンがやったように。怒りがなければ表現できない。差別されたら表現しよう。

幸せになる薬を求めて、ドラッグストアに行ってみた。効能には個人差があるので、幸せを保証できないという。病院に行っても、幸せになる治療法はなかった。アングラ市場や新興宗教団体にも行ってみた。効能を保障されたが、個人差がありそうだ。諦めた僕は、書店で小説を購入した。

「市場にあるたくさんの商品は、消費者を幸せにします」「ならどうしてたくさんの消費者が不幸なの？」「世界中の宗教が、人間の幸福を説いています」「ならどうして宗教対立や紛争が起きているの？」絶望した僕は、結局また小説に戻ることにした。いい小説。小説は裏切らない。

交差点に子どもの死体が横たわっていた。僕は死体の体を抱きしめて手のひらで撫でた。皮膚はまだ生温かい。何度も皮膚を撫でる。この皮膚に血はめぐっていない。けれど、まだ生温かい。死んだばかりだからだろうか。

牛丼屋に行ったら、お客さんが全員牛だった。メニューは「ヒューマン丼」というのしかない。ヒューマン丼？って人類愛溢れる丼だろうか。みんなヒューマン丼を食ってる。肉がやたらとおいしそうだ。僕もヒューマン丼を頼んだ。

ハンバーガーショップに行ったら、ハンバーガーは売ってなかった。お客さんは牛ばかり。みんな「ヒューマンバーガー」というのを頼んでる。ヒューマンバーガーって、ヒューマニズム溢れる食事だろうか。牛がヒューマンバーガーをうまそうに食べる。僕はヒューマンSセットを頼んだ。

カフェに行ったら、メニューにカフェラテがなかった。客はおしゃれな牛ばかり。みんなヒューマンラテというのを頼んでいる。店員さんにどんな飲み物が聞いてみた。「母乳にエスプレッソを入れた飲み物です」「母乳って牛の母乳ですか」「人間の母乳です」僕はヒューマンラテを飲んだ。

僕が出会った知人のうち、数百人が夢に出てきた。僕の人生にとって重要な人たちばかりではない。「私達全員もう死にました」と一人が言う。知人の多くがこんなにも死んだのか。死んだ事実を知らない人もいた。記憶の隅に追いやられていた人もいた。人間はみな死ぬことを思い知った。

僕が今まで生きてきた中で、何人の人間とすれ違ってきたの
だろう。僕の人生の視界に入ってきた人間は、今まで何人だろう。
日本の人口は1億2千万人以上だ。憶測だが、僕は数千万人とす
れ違ったはずだ。そのうち半分以上はもう死んでいるかもしれ
ない。生きることの厳しい現実だ。

カラオケボックスの古いビデオクリップに映る俳優達は、もう俳優業を辞めただろうか。彼ら彼女らも、人気俳優になりたかったのだろうか。カラオケのビデオクリップを撮影した監督も、有名監督になりたかったのだろうか。どれだけの人の夢が壁に当たっただろう。何人壁を抜けただろう。

日曜日の中野駅前で大勢の人を見かけた。僕の人生に直接関わりはないが、間接的に関わっている隣人たちだ。このうち、20年後に生きているのは、何人いるだろうと思った。今日すれ違った人のうち、何人の人が20年で亡くなるのか。

今日出会った人のうち、20年後に亡くなる人もいるが、20年前はこの世界に存在していない人も大勢いた。今日出会った人のうち、何人かは、この世界に新しい命をもたらささえするだろう。自分が子どもを生まなくても、誰かの命を救う人がいるかもしれない。人は死ぬし、生まれる。

1年でできることはわずかかもしれないが、20年も時間があれば、多くのことができる。20年で成し遂げたいことの計画がなければ、20年も無駄に浪費される。人生に無駄なことなど1つもないかもしれないが、僕は自分の意志で、長期間持続する何かを作り上げたい。慎ましい夢だ。

1秒の積み重ねで、地球の歴史ができた。1秒の積み重ねで、僕の人生もできている。これから後何年あるのかわからない。だからこそ、1秒も無駄にせず仕事をしていきたい。これを強欲と呼ばれればそれまでだが、いつでも獰猛でいたい。1秒から20年ができることを忘れずに。

例えば今日辛いことがあったとしても、20年後から見れば何でもないことだ。現在だけに集中しろという言葉は、今の痛みを目を向けるためにあるのではない。将来を思えば人は耐えることができる。将来のために、今に全力で集中する。全力で生き切る。痛みも乗り越える。

満員電車に乗る人たちのうち、何人が20年後も生きているだろう。問い方を変えてみよう。満員電車に乗る人のうち、20年後も生きていると確信している人は何人いるだろう？ みないつか死ぬことを忘れて、満員電車に乗っているのだろうか。20年後の自分を意識しているだろうか。

満員電車に乗っている人のうち、20年後亡くなる人も多いけれど、20年前生まれていなかった人も多いだろう。僕らは死ぬが、命を生み出すこともできる。満員電車に乗る人のうち、何人が、残りの人生で命を育むことになるのだろう。あるいは、もう育んでいるのだろう。

僕は20年以上前に生きていた人も納得するような人生を毎日歩みたい。生活環境の変化は産業革命後、加速するばかりだが、望むなら100年前の人を前にしても、恥のない毎日を送りたい。

友人の婚約祝いで、帰りが終電間際になった。いつもは駅前の路上で座っているホームレスのおじさんが、ビニールシートをかぶって道端で寝ていた。あのおじさん、一日中座っていたわけではなかったのだ。歩行者は通り続けるし、アーケードの街灯もついて眩しいが、夜は寝るのだ。

道端に座っているホームレスのおじさんは、生活保護の申請をしないのだろうか。ホームレスという生き方を自分で選択したのだろうか。否応なくホームレスという状況に追い込まれたのだろうか。ホームレスというライフスタイルは惨めなものだという考えは、差別的な思い込みだろうか。

風邪をひいて体がだるい。僕がホームレスだとして、風邪をひいたとしたら、路上で体を丸めて苦しむばかりだ。医者に行けないし、ドラッグストアで薬も買えない、誰か頼る相手もない。道行く帰宅者は、いつも通り歩き去っていくばかり。

今日22時30分過ぎに帰ってきたら、駅前にいるホームレスのおじさんがベッドメイクしている場面に出会った。日中ずっと座っているおじさんが、宝くじ売り場のシャッターの前にダンボールを敷く。青梅街道は深夜でも混雑しているし、終電まで帰宅者が歩き続けるが、おじさんは寝る。

歩道のバス乗り場には、椅子が三個くらいおかれている。そこに時々ホームレスのおじさんが座っている。たくさんの荷物を椅子の脇において、古い文庫本を読書している。彼がバスに乗ることはないだろう。彼以外の誰も椅子に座っていない。いつまでもバスを待つホームレスのおじさん。

低収入で介護サービスを使えない人を報道するTBSのニュースキャスターは、いいスーツを着ている。若者の就職率が過去最低になることを伝えるNHKのニュースキャスターも、いいスーツを着ている。ニュースキャスターは全員高いスーツ着用で美形。格差とはまさにこのことだよ。

別にニュースキャスターが高いスーツ着て髪型きめきめでもいいけど、だったら貧困の問題を伝えるなよと思ったり。テレビ画面に映るスーツの生地と、報道内容の対立。日本には2つの世界が存在する。競争で勝利した者の世界と、苦しむ者の世界。

地上波のゴールデンタイムやプライムタイムでニュースを伝えるアナウンサーは、就職競争のスーパーエリートだ。高収入で仕立てのよいスーツを着る勝利者たちが、新卒者の就職率の厳しさを伝える。矛盾を感じる。状況に苦しむ当事者自身がネットで報道している方が、真実味がある。

いい大学に入り、就職競争を勝ち抜いて、アナウンサーなど高収入の人気職に就職したとする。働く目的は、自分の生活をよりよくすることだけにあるのではない。良い仕事を成そうとすることが必要だ。良い仕事とは、より多くの人生活を豊かにするために成されるべきだと思う。

私は超高倍率のテレビ局のアナウンサー採用試験を勝ち抜いて、アナウンサーになった。仕立てのよいスーツを着て、貧困の問題を報道した。ニュースを契機に、貧困問題の解決に取り組もうとする人が増えたらいい。報道は、テレビ局や僕の収益のためでなく、社会全体の幸福のためにある。

ニュース番組の裏では、お笑い芸人がたくさん出るバラエティー番組が放送されている。ニュース番組でも視聴率をとる必要があるから、ニュースがバラエティー化する。お笑いもニュースも、社会全体に幸せを広げるために電波を使っていることを忘れないでおこう。

コンビニで買い物をする時、店員さんはありがとうございますと言うけれど、お客さんがありがとうございますと言り返すことは滅多にない。いつも同じ店員さんだけれど、話はしない。店員さんの私服がロックスターっぽかった。音楽の夢を追っているのだろうか。コンビニの恩恵に感謝しよう。

ドラッグストアで売っている風邪薬のコルゲンを飲むと、頭がぼ
っとして多幸福感に包まれる。ダウン系のドラッグも似たような
感じだろうか。コルゲンは15歳未満服用禁止だし、5日連続の服
用はしないで下さいと取扱説明書に書かれている。5日連続で飲
んだら幸福な廃人になるだろう。

深夜1時30分過ぎ、外から女性の「ヒャー！」という悲鳴が聞こえてきた。「ヒャー！ヒャー！」と続く。初めは男の変態が出たと思ったが、声が太くてハイテンションなので、女性の方が変質者かとも思い直す。「イヤーヒョー！」と深夜に叫びが続く中、僕は眠って翌日会社に出勤した。

美容院の待ち時間、いつもより長く待たされたら、いらいらした。コンビニで店員さんのレジ打ちが遅い時も、急いでいるわけじゃないのにいらいらする。脳が想定した現実通りに現実が進展しないと、脳神経がいらつくのだろうか。そんなに急ぐ必要もないのに、不要な怒りだ。

人を愛するとは、人を尊重すること。好きだ、愛していると言うより、君を尊重していると伝えた方がいいかもしれない。愛していると言った時、その言葉の裏には、相手を独占したい、相手の気持ちを支配したい、自分の性欲を満たす為に相手を利用したいという下心があるかもしれないから。

獰猛に生きる。自分の人生が抱えている問題に対して獰猛に。多くの人が抱え込んでいる問題に対しても獰猛に。砂漠で生きる汚れた獣として、獰猛に次を狙う。

疲れた時、体が重い時は、自分が今7歳だと勘違いしてみる。7歳の自分の体は軽く、頭もすっきり明晰だった。迷いも心労も未来への絶望感もなく、隣人達に守られ、愛されていた。7歳の頃の間覚を意識して毎日生きることができれば、心労もたまらなくなる。

「僕が望めば、多くの人を幸せにできる」「私が望めば、多くの人を不幸にできる」「僕が望めば、誰の人生にも関与せず生きることができる。僕の選択によって、可能性が変わる」「私たちの選択によって、私たちの社会の未来が変わる。ひどく当たり前の真実」

尖閣諸島にAKB48でも派遣して、ニコニコ動画でライブ生中継でもしたらいいんじゃないだろうか。歌は、「言い訳Maybe」とか。国境では生死をかけた駆け引きがあるが、本土では官能的な市場競争が加速している。この対立構造。守るのは官能の市場か。

太平洋戦争中の日本では、上官が部下に暴力を加えるのは当たり前のことだった。日清・日露の頃はどうかっただろう？ みんな動員されてないから、記録がないだけなのだろうか。あるいは、江戸時代は？ 武士道は立派だというけれど、上の命令で、部下は切腹する。昔、人の命は軽かった。

アウンサンスーチーはどんなに監禁拘束されても、自由と民主主義の信念を曲げずに活動している。あれほどの信念を持って、活動できるだろうか。困難を前にしても、くじけずに笑顔でいられるだろうか。

自由民主主義国家の政治や社会がどんなに醜悪でも、アウンサンスーチーは、自由と民主主義の理想を信じている。何故こんな醜悪な制度を信じていることができるんだろう？ 独裁国家の方が、もっと醜悪だからだろうか。自由と民主主義の国にいる僕たちは、より理想的状態を目指せるのか？

日本国内では殺人事件やら外交問題やら政治家と官僚の腐敗の問題が連日報道されているけれど、こんなにも腐った自由民主主義制度を理想として掲げることができるのだろうか。自由民主主義を理想だと思っている国の人、国内に腐敗、汚職、殺人がもつとはびこっているのだろうか。

「あなたが想定する読者はどんな人ですか？」 「明日いなくなるかもしれない人です。全ての人、明日いなくなるかもしれない可能性を持っています。そうした人たちに最後の言葉を届けたいです。最後に読んでもらう言葉だから、言葉一つ一つに責任が伴います」

「文学が扱う領域とは何ですか？」「自然科学は、数式や法則で世界を説明します。社会科学は、統計や社会調査で世界を説明します。文学は、数学、物理学、生物学、社会学、経済学がとりこぼすもの、それらどの学問も扱えない問題を扱うために存在するんです。だから僕は文学生です」

「小説を書くのが好きじゃないのに、仕事として小説を書いていると最近思う。けど、たいした金にならないのに小説を書き続けているのは、やっぱり自分、小説が好きだからじゃないかな。嫌いだったら別の儲かる仕事を選ぶはずだし」「好き嫌い考えるのはやめて、小説を愛してみたら？」

超短編小説とは、すごく短い短編小説をさすのではない。短編小説の固定観念を突き崩す、短編小説のことをさす。超現実的が、すごい現実的なことを意味しないのと同じ。短編小説を超越する、短編小説を乗り越える、メタメタの短編小説。

超現実主義とは、すごいリアルな描写を心がける運動ではなく、近代小説のリアリズムの技法を疑う運動だった。現代の表現は、リアルよりもヴァーチャルリアルが主流だから、現代メディア表現に対抗する運動は、超仮想現実主義になるだろう。シュール・ヴァーチャル・リアリズム宣言だ。

革命家は詩を書いて、革命を推進した。多忙な革命家が短い詩を書くのは許される。革命家が、長い小説を書くのは格好悪い。お前暇なのかという話になる。革命に挫折したドストエフスキーなどは、小説を書いた。社会の改善に挫折し、絶望した人は、小説を書けばいい。

現代の革命家は一昔前の革命家みたく詩も小説も書かないだろう。21世紀の革命家はYouTubeに動画をアップするだろうし、ツイッター、ブログ、ホームページなどネット上の技術を駆使して、革命を成し遂げるだろう。インターネット自体が革命だ。ネットは人々を解放する。

ブッダやキリストの言葉やスピリチュアルな本から、時々感銘を受けるけれど、宗教的な人たちと交際する気はない。正しい信仰でも組織になると、危険な場合もあると思う。その点小説は、常に組織として無力だ。だから、小説は安心できる。

小説を読んで、好きな人同士が集まる。彼らが集まったところで何もできない。各自小説を書いて、小説を読むことしかできない。編集とか印刷とか分業が始まるかもしれないが、小説好き集団が宗教組織みたいな動きを見せることはないだろう。小説家は、いつでも孤独な創始者だ。

小説のことをもっと信じていいかもしれない。小説は無力で、組織的な動員力がない。だからこそ、小説は信頼できる。無力なことは、それだけで力だ。無力だからこそ、戦うことができるし、愛することができる。

グーグルは、世界中の人が、あらゆる情報にアクセスできる世界の実現を目指している。物理的な本は、本を持っていないと読めないけれど、ネット情報に本の情報が存在すれば、誰でも本の情報にアクセスできる。壁や秘密がない世界、あらゆる生命情報の完全公開が目指されている。

情報のオープン化が進めば、相手が頭の中で何を考えているのか、感じ取れる未来がいつかやってくる。SFの中の夢の話じゃない。グーグルやウィキリークスが目指す情報環境の理想は、そうした情報の完全公開化、自由化だ。万人の思考が流出するツイッターも、その進展に貢献している。

言葉のない時代は、叫びと体感で相手を理解していた。言葉のある時代では、口にしない想いは秘め事として隠蔽された。書き言葉の時代では、書いて表現された記録が大勢の人に公開された。ツイッターの時代では、人間の思考の流れがそのまま全世界に発信される。情報公開の歴史最前線。

全ての壁、迷い、ためらいを取っ払って、全世界の生命体と意思疎通できる理想的世界。その世界では、憎悪や性欲や嫉妬心やくだらな話も噴出する。バリアがない世界では、人間の否定的側面の露出の方が多くなるはずだ。しかしパンドラの箱の底には、自由化という希望がある。

生活に必要な情報を隠蔽されている人。情報から締め出されているが故に、苦しい生活を送っている人。そうした人に情報を送り届けること。これがインターネットの働きだとしたら、小説や詩の働きと同じだ。人間を苦渋から解放するために、ネットと小説が存在すると信じながら働きたい。

「リアルな生活とは、自分の体と頭脳をコントローラーにして、プレイするゲームである」「リアルライフの目的は、ゲームで勝利することなの？それとも、ゲームを楽しむことなの？」「このゲームのプレイ目的は、個人が自分の考えで自由に選択できる」

「何でも自由に選べるとしたら、カオスになるんじゃない？」
「リアルライフには、一定の法とルールがある。ルールから逸脱ばかりしていると制裁が加わる」
「じゃあ自由とは言えないんじゃないの？」
「ルールとは、他人の自由を尊重するために存在するんだ。自分も他人も自由なのだから」

「法や決まりごとは、人々の自由を拘束するために存在するんじゃない。人々の自由を尊重し、守るために存在する。みんなが自由に振舞っては、社会は対立ばかりになる」「人々の自由を拘束する法の方が多いように思うけど」「そう思うなら、話し合えばいい。法は変えられる」